The Japan Society of Educational Sociology

エスノグラフィにおける権威性・政治性・暴力性再考
—ハイデガー存在論によりながら—

中村 浩子（文教大学非常勤）

0．なぜいまハイデガー存在論か：世界を捉えようとする私

本発表の目的は、教育研究において民族誌的方法を採用する際の今日的課題、すなわち、権威性、政治性、暴力性について、『存在と時間』におけるハイデガー存在論に学びつつこたえていくことである。

教育社会学では、「解釈的アプローチ」が紹介されて以降、そして近年では研究の臨床性への関心も手伝って、民族誌的方法は手法として確立されたと言ってよい。しかし人類学においては周知の通り、民族誌・民族誌家の権威性、政治性、暴力性に対する反省がなされ、長らく活発に議論されてきている。

とりわけ通俗的な意味での「異文化」や「異郷の地」を研究するのではない傾向にある日本の教育研究は、その成果が「書かれる者」の生活に影響を及ぼしやすい。にも拘らず、自らの学問的営為が疑問に付されかねないこれらの問題群について議論が尽くされているとは言い難い。人びとの営みを観察し、解釈し、書くという自らのありようこそがいま問われていることに、充分な自覚がなされてきていないのである。それは、「書く者」としての私への反省の欠如とも言える。

本稿がハイデガーの存在論に学ぼうとするのは、ハイデガーが事象世界を捉えようとする私を主題として扱っているからである。1927年に発表された『存在と時間』の主題は、「現存在」の「存在論的分析」、すなわち、「人間存在」が「どう在るのかの分析」であり、分析をしようとする人間である私の分析でもあった。

教育社会学との関係で言えば、現象学の系譜はこれまで、とりわけ英米において展開されてきた。シュッツによる現象学的方法や、ガーフィンケルがはじめたエスノメソドロジーなどが挙げられ、いずれもフッサール現象学に多くを負っていると

される。これらはそのため本研究でいう現象学的方法と共有するところが少なくない。しかしこれらはハイデガーを経由していない。

1．民族誌的方法における権威性・政治性・暴力性

クリフォードらの『文化を書く』（1986年）以降、「書く」ということの「より優れたモード」の探究が続けられている。どう書くのかは今や、個々の民族誌家がそれぞれにそのつど模索しなければならない状況にあると言える。しかしこのクリフォードらの提起は、問題を「レトリックの次元に還元」してしまい、「対象である人びとの行為や実践への視点からの乖離」を促したという批判もなされている（田辺、2002年）。

ハイデガーの解釈学的現象学は、現実の人間社会を知り、理解するという従来からの民族誌の目的から離れずに、現実の人間社会を対象化する研究者のありようをも正当に扱い、なおかつどう書いていくかを展望する地盤を一挙に提供してくれている。

また「書かれた者」に、「自分たちの生が語られていない」といった違和感を抱かせるような「要約の暴力」（志水、2004年）をいかに軽減できるかについても、「ありのまま」を「見えるようにする」というハイデガー現象学は示唆的である。

2．何をどう書くのか：民族誌的方法再考

フィールドワーカーはその場に極力影響を及ぼすべからず、などと言われてきた。しかし本発表ではこうした立場に、カントがかつて『純粋理性批判』において客観を「物自体」と「現象」とに分けるよう論じたようなダブル・スタンダード、つまり「本当の世界」と「フィールドワーカーが見ただけの世界」とを区別するような発想の残存

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

を見てとる。

ハイデガーはカントの「物自体」を斥けている。その上で「現象」を記述していこうとするこの現象学はあくまで、何があるか、ではなく、人間にとってどうあるか、を主題とする。そしてそこに、分析者と対象者といったヒエラルキカルな区別の消滅を見ることが可能である。

加えて本発表では、ハイデガーのいう「解釈」概念に則って、「解釈」が現象学や学問の特権的営みではないことが導きだす。解釈は必ずしも言葉を伴わない。そこに生きる人びとが言葉にする以上のことを人びとは了解しているし、解釈もしている。

しかし本発表のテーマからして注意すべきことがここで生じる。

民族誌的記述においては、そこに生きる人びとの権威を奪い取らないために、そこに生きる人びとの世界を、そこに生きる人びとの実存を跳び越えることなく描きたい。世界を解釈するために、言葉ではなく、「黙して語らない経験」をこそ記したい。しかしそこには、相手の自尊心を砕く危険性、相手の心の自由を奪いとる危険性が孕まれている。

3．私の民族誌・・か？

当の世界を、私という異物が入ったおかげで変えてしまったのではないか。こうした不安は、現象学的方法においては無効である。

「世界」を「見えるように」させるには、まずもって研究者自身である私にその「世界」が見えていなければならない。そしてその最も有効な方法はやはり、そこに身を置いてみることであろう。そしてそこにおいてわれを忘れるほどに道具を使用し、そうふるまう場面において自己を了解できる状況に私が至ったのであれば、あとはもう、私に知覚されたものをただ記述していけばよい。そこではもはやメルロ＝ポンティも言うように、「われわれはほんとうに世界を知覚しているかどうかは問題にすべきことではなく」なるはずである。参与した私が記述する世界は原理的に、私の経験、私の存在から独立して存在しえないからである。

また民族誌を書くにあたり、とりわけ著者である私の心境を書き落とさないことは、記述における「公正さ」の担保以上に、「世界」を書くために重要になってくる。

心境は、どんな緻密さを誇る認識より多くを示すものとなりうるとハイデガーは言う。それは、私がおかれてある世界について、私がどうおかれているかについて、そして私の実存をも首尾よく示してくれるものである。そしてそれは、私の立場性を自ずと示すものでもある。

さらに本発表では、民族誌とは「私だけの構築物か」が問われる。たしかに「書かれた物」は、他ならぬ私が見て、感じ、考え、書いたものである。しかし現存在（人間）の存在構成は「世界＝内＝存在」である、とハイデガーは洞察している。

ところでこのハイデガーのテーゼは、現象学をたちあげたフッサールの主張とは相容れない。すなわち、特権的なコギトとして想定されてきた自我を否定する点において、である。そして両者の相違は、民族誌との関連で重要な点である。

フッサールに従うと、研究者は、自らが経験した事象そのものとしての世界に忠実であるようでいて、分析や探求が始まるその時点から、判断停止によってとつぜん自分だけが離れてしまうことができる。しかしそれでは、分析者は立場の自由な者だということになってしまいかねない。

記述している者がいくら私であっても、その私を構成するものは世界＝内＝存在なのであり、その世界＝内＝存在である私をすでにして構成している世界を記述しようとしているのであって、それは、自分だけのものでは決してない。その世界とは、私が“フィールドワーク”を行った世界における他者と共有し、わかっているものである。私の経験を書くからと言って、「書かれた物」が私の構築物にすぎないと謙遜するつもりで言うことは、却って独我論になりうる。

最後に本発表では、私自身の関わりを描く上で、素朴で非反省的だった私の言動や心境をこそ描く意義についてふれる。そしてそうすることが、著者の権威性の相対化へと至ることを見る。

また民族誌の暴力性を少しでも軽減する可能性を、山口昌男（1970年）のいう「己れの蘇りの喜び」が相手にももたらされるまでを共有することに見出していく。

NII-Electronic Library Service